樋口一葉　にごりえ

樋口一葉は、近代以降初めて作家を仕事にした女性です。美貌と文才を兼ね備えていたので、男社会の文壇（文学関係者のコミュニティ）ではマドンナ的存在でした。
父の死によって 17 歳で家を継ぐことになり、父が残した多額の借金を背負いました。
「奇蹟の 14 か月」という死ぬ間際の期間に、『大つごもり』『たけくらべ』『十三夜』などの歴史に残る名作を発表したのち、肺結核で亡くなりました。

明治維新　→　女戸主になる
音を読む　→　たけくらべ　耳で聞いて楽しい　→　言文一致　→　話し言葉
作家の人生　→　職業作家　→　小説家　→　肺結核　→　奇跡の 14 ヶ月

本郷 6 丁目　桜の家

中島歌子　萩の舎　14 歳→歌人

半井桃水　新聞記者　18 歳→文筆家

本郷区菊坂
　文藝倶楽部　1895-9　投稿
　質屋伊勢屋

下谷区竜泉寺　荒物屋　21 歳
　吉原遊郭　→たけくらべ

本郷区丸山福山
　小説家として生計を立てる
　砲兵工廠　新開地

文学界　たけくらべ　発表
三人冗語　森鴎外　幸田露伴　斎藤緑雨
文学界同人
　斎藤緑雨　一葉全集

樋口一葉（1872―1896）
「にごりえ」文藝倶楽部　1895-9
あらすじ
・ お力は一枚看板の酌婦として働いていた
・ かつてお力と源七は恋仲だったが、源七が破産し２人は別れた
・ お力は新たな上客である結城と出会う
・ 結城はお力に興味があり、またお力も結城を気に入っているように見える
・ お力はこれまで隠していた自分の過去を結城に打ち明ける
・ 源七はまだお力のことが忘れられず、ついには妻と別れる
・ そして盆を過ぎたある日、２つの棺が町を行く
・ 遺体は源七に刺されたお力のものと、自ら切腹した源七のものであった
・ 無理心中なのか、合意の上だったのか、その答えは誰にもわからない

「にごりえ」梗概
新開(菊坂下砲兵工廠)
銘酒屋(空壜か何か知らず)
　　樽→瓶詰めへ
　　戦費調達　→　税金→酒
　　新開　銘酒屋
　　間口 2 間　1 階は銘酒や
　　2 階建→性サービス

小料理屋「菊の井」で働くお力は、かつて布団屋の源七と恋仲でした。今は別れていますが、源七はお力のことが忘れられません。しかし、お力にはよりを戻す気は全くありませんでした。
ある雨の日、客引きをしていたお力は朝之助という男を店に引き入れます。その後、朝之助は週に数回、店に来るようになりました。

菊の井　2 間間口 2 階作り
　おタカ　銘酒や

お力(赤坂から新開へ)
　菊の井のお力

お力の履歴話し

酌婦、接客→不安から逃れたい

源七は、以前はお金に余裕があったので菊の井に通っていましたが、今は妻のお初と息子の太吉とその日暮らしをしています。しかし源七は、いまだにお力に思いを寄せ続けていました。
一方で、お力を含めて男性にお酌をする酌婦は、客からお金を吸い取って破滅させる「白鬼（しろおに）」と呼ばれています。お力は、そんな酌婦の仕事をしながらも、将来に対して漠然とした不安を抱えていました。

ある日、その不安につぶされそうになったお力は、仕事中に町へ飛び出してしまいます。

結城朝之助(身は無職業) 30 才ぐらい
　お力と朝之助の会話
　お力の身の上話し
　　お力の履歴、
　　おつかい　持病　親　出世

　源七との縁、馴染み

　そして、朝之助と会って菊の井へ戻りました。お力は、他の客を差し置いて朝之助を接待しました。
　そこでお力は、今まで誰にも語ることのなかった自分のことを話し始めます。
　お力は、「貧しい家庭に生まれて酌婦なんかをやっている自分は、もう這い上がれない」と嘆きました。
　それを聞いた朝之助は、「お前は出世したいんだな」「思い切ってやればいい」と言います。その夜、お力は朝之助と朝まで過ごしました。

布団やの源七(今は八百屋の裏に)とお初(源七の妻)
　　源七　お初の暮らし
　　太吉と入浴、食事
　　菊の井への未練
　　お力ロス→家業を潰す

　　お力との馴染み、思い出

菊の井下座敷　→　突然逃避
しかし、お力、我にかえる
結城朝之助と出会う
　お力の酒酔い、気まぐれ、
　親父
　おつかい、気狂い、出世

　お力に対して未練のある源七は、仕事にも精が出ません。そんな源七を見たお初は、源七に冷たい言葉を投げかけます。
そんな時、太吉が高級カステラを持って帰ってきました。お初が「誰から買ってもらったの？」と聞くと、太吉は「菊の井の鬼姉さん（お力のこと）」と答えます。
　それを聞いたお初は激怒し、「お父さんを怠け者にし、いま貧乏暮らしをするようになってしまった元凶の女から菓子をもらうなんて、情けない」と言って、カステラを空き地に投げ捨ててしまいます。お初は、それを見た源七と口論になり、家を出ていくことにしました。

源七とお初
　貧しい暮らしの様子
　太吉のしつけ
　お初の愚痴
　お力への妬み
　菊の井の鬼め、から
　　子(太吉)が菓子を貰う
　不幸の原因、お力に当て付け、
　お力が鬼なら、お初はお前は魔王だ、出て行け
　お初への離縁
　女房の嘆き、謝罪、覚悟
　太吉を連れて出る

新開より棺 2 基出て行く。心中？
　見しもありと伝える

　ある夏の夜、町では 2 つの棺が運ばれています。大通りに集まった人たちは、「あの日の夕暮れに、2 人で立ち話をしてたのを見た人がいる。きっと心中に違いない」

「あの女が心中なんてするわけない。後ろから斬られて、逃げるところをやられたに違いない」「菊の井は大損だ」と口々にうわさします。人々は、2 人の死因は良く分からないが、恨みの残る死なのだろうと感じました。

iPhoneX から河野清一が送信